

船名	場所及日時
岳陽丸	昭和六年五月廿二日午後五時 蕪州下流
瑞陽丸	六月七日午後八時五十分 九江下流
南陽丸	七月十四日午後四時十分 大冶黄石港
鳳陽丸	七月十四日午後三時 黄石港
武陵丸	八月十三日 蕪湖上流
大吉丸	九月四日午後五時 八ボック、ロック標識
大福丸	九月八日午後十時 九江下流
武陵丸	九月八日午後十一時 四十分 蕪湖

(一) 上海漢口航路

出ス
 (一) 不当射撃
 右不当射撃ハ一九二六年以来頻繁セル所ナ
 ル又日本商船特ニ日清汽船會社ヨリ報告ア
 リタル一九三〇年一月以来一九三一年八月
 迄ノ不当射撃ノ回数ハ別表ニ示ス如ク實ニ
 百三十件ナリス。而シテ右射撃ハ小銃ノミ
 ナラス母ニ大砲ヲ以テモ為サレタルモノナ
 リ。又本表ニハ掲記セサルモノ日本帝國軍艦
 ニ對シテ射撃ヲ加ヘタルモノト數回アリトス

昭和六年八月十四日



武陵丸	宣陽丸	鳳陽丸	南陽丸	大貞丸	鳳陽丸	大貞丸	大利丸	南陽丸	武陵丸
十一月三日午後十時	十一月廿七日午後九時	十一月二十三日午後九時	十一月十八日午後六時	十一月十九日午後七時	十一月十六日午後九時	十一月十五日午後十一時	十一月九日午後十時	十一月八日午後十時	十一月三日午後十時
同口	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州

大吉丸	大利丸	洛陽丸	当陽丸	宣陽丸	大吉丸	大吉丸	大貞丸	南陽丸
十一月二日午後六時	十月十八日午後三時	十月十一日午後十時	十月八日午後五時	九月廿七日午後四時	九月廿七日午後一時	九月十四日午後五時	九月十日午後二時	九月九日午後四時
蕪州	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州	蕪州



(二) 中流及湖南航路		
船名	場所	日時
信陽丸	(昭和五年) 一月一日午前六分十五分 岳州(命中彈客室三三號)	
沅江丸	一月廿五日午後十一分 長沙附近	
大亨丸	一月廿四日午後十一分 枝江上流	
武陵丸	一月廿六日午後四十分 石門二十四標左岸(支那) 八船客室負傷(本船命中彈十五発)	
信陽丸	一月廿六日午後四分 石門二十四標	
信陽丸	三月廿二日午後七十分 郝台の上流	
吉陽丸	五月廿五日岳州上流 八仙州	

襄陽丸	十一月六日午後五分 木子工一、ロック
大貞丸	十二月五日午後五分 黄鰲口
大貞丸	十一月十一日 蕪州
南陽丸	十二月十日午後十分 四十分 エラー、ロック
大和丸	昭和三年三月十日午後一分 武穴
大亨丸	七月二十日午後七分 安慶下流 沼風港

信陽丸	大鶴丸	大宮丸	当陽丸	信陽丸	武陵丸	大宮丸	湘江丸	武陵丸	当陽丸
九月廿三日午後四時五十分至十九日之標A下流	九月二十三日午後四時五十分至十九日之標A下流	九月十八日午後一時十分至十九日之標	九月十七日午後四時十分至十九日之標	九月十七日午後四時十分至十九日之標	九月十七日午後四時十分至十九日之標	九月十七日午後四時十分至十九日之標	九月十七日午後四時十分至十九日之標	九月十七日午後四時十分至十九日之標	九月十七日午後四時十分至十九日之標

P.V.M. 46 162

162

当陽丸	大宮丸	大宮丸	沅江丸	信陽丸	湘江丸	信陽丸	信陽丸	大宮丸	大宮丸
七月廿一日午後四時十分至十九日之標	七月廿一日午後四時十分至十九日之標	七月廿一日午後四時十分至十九日之標	七月廿一日午後四時十分至十九日之標	七月廿一日午後四時十分至十九日之標	七月廿一日午後四時十分至十九日之標	七月廿一日午後四時十分至十九日之標	七月廿一日午後四時十分至十九日之標	七月廿一日午後四時十分至十九日之標	七月廿一日午後四時十分至十九日之標

P.V.M. 46 161

161

信陽丸	武陽丸	武陽丸	大高丸	武陽丸	信陽丸	武陽丸	信陽丸
十月十日午後四時四十五分二十立標(発被射)	内一発特等空室空室硝子ニ被射通他一発ハ	日本人般客一名ニ擧退傷)	十月九日午後四時上車降	十月十日午後一時四十分上車降	十月十日午後四時四十分上車降	十月十日午後四時四十分上車降	十月十日午後四時四十分上車降

P.V.M. 46 164

164

大高丸	信陽丸	武陽丸	大高丸	武陽丸	信陽丸	大高丸	武陽丸
十月十日午後四時四十分上車降(三等船客一名及ボイ	ラ等船客一名)	十月十日午後四時四十分上車降	十月十日午後四時四十分上車降	十月十日午後四時四十分上車降	十月十日午後四時四十分上車降	十月十日午後四時四十分上車降	十月十日午後四時四十分上車降

P.V.M. 46 163

163

当陽丸	大亭丸	信陽丸		信陽丸	信陽丸	武陵丸	武陵丸		当陽丸
十二月二十八日午後二時三十分塔石驛	十二月十五日午後五時石首山上	十二月十四日午後六時石首	白螺磯	十二月十八日午後三時石首左岸同日午後三時四十分	十二月十一日午後十時石馬柵	十二月十二日午後八時石首山林麓	十二月七日午後三時石首山	十二月五日午後三時石首山	十二月三日午後三時石首山(三)

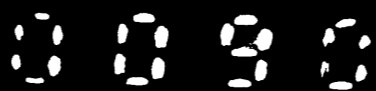
P.V.M. 46 166

166

信陽丸	信陽丸	沅江丸	大亭丸	武陵丸	大亭丸	大亭丸	当陽丸	大亭丸	当陽丸
十二月六日午後八時石首山	十二月四日午後三時河口附近	十二月四日午後三時石首山	十二月四日午後三時石首山	十二月四日午後三時石首山	十二月四日午後三時石首山	十二月四日午後三時石首山	十二月四日午後三時石首山	十二月四日午後三時石首山	十二月四日午後三時石首山

P.V.M. 46 165

165



大和丸	同	同	同	信陽丸	塔陵丸	塔陵丸	長陽丸	湘江丸	信陽丸
二月八日午前九時三十分石首山	三月十六日午後六時四十分域陵磯上流	三月七日洋碼頭	二月二十八日洋碼頭	二月七日揚林磯石首	二月十二日午前九時三十分石首	二月一日午後二時石首	十一月三十日午前十時三十分岳山	二月七日午後一時五十分揚林磯	二月六日石首

武陵丸	信陽丸	信陽丸	武陽丸	信陽丸	湘江丸	信陽丸	信陽丸	武陵丸
十一月二十八日午後二時三十分塔石驛	十一月三十日午前八時十五分石首	昭和六年 二月五日午後三時調関口	一月三日午後二時半石首	同	一月十一日石首山	一月十一日午後二時石首山	一月十六日限江渡(一彈命中)	一月二十日石首山

船名	場所	夜日付
涪陵丸	(昭和五年) 四月二十六日午後七時十分	州
涪陵丸	四月二十六日午後五時十分	サウス
雲陽丸	九月十三日午後十一時十分	巫山峽
	(昭和五年)	
	四月二十六日午後三時十分	遊洞(正視軍隊ヨリ約五百発)
	射撃シテ二百発餘命中ニ中国人ニ番「コン」	
	左舷ニ命中通銃創	
涪陵丸	四月二十六日午後四時十分	万戸
	八月四日午後三時十分	錦州

P.V.M. 46 170 170

櫻江丸	七月十四日	沱江
大吉丸	八月五日午後四時十分	石碼頭
大吉丸	八月二十日午後七時十分	十七番
信陽丸	九月十八日午後十時十分	洋碼頭
宣陽丸	九月二十六日午後三時十分	謙家洲
宣陽丸	十月二十六日午後五時十分	白螺磯
旬	十一月一日午後三時十分	龍口
信陽丸	十一月十日午後十時十分	湖園口

P.V.M. 46 169 169

(一) 土匪ノ掠奪

昭和二年(一九二六年)以後今日迄起リタル
土匪ノ日本(外國)船舶襲撃事件ヲ左ニ摘録ス
(1) 君山丸及同亨丸ノ件

昭和二年十二月二日未明戴昌汽船會社長
沙常德線航中ノ君山丸及同亨丸ハ南湖南
州附近ニ於テ五十名余ノ土匪ニ襲ハレテ機室
ノ金庫掠奪セラル。其ノ際乗客一名死亡ニシテ
身傷ニ瀕ス。為乗込ニ居タル民團兵七名ハ
全部武器ヲ掠奪セラル。

REKKAHOHONBU

(2) 同上

昭和三年一月二十一日高麗西船船ハ白馬赤
附近ニテ再々第四軍ノ敗兵ト称スル兵
匪者十名ノ為襲撃手ニ受テ乗客及船員ノ所掠
奪強奪セラル。其ノ際乗客一名ハ被ト
レテ拉致セラル。

(3) 衡州丸、同利丸及常德丸ノ件

昭和三年一月二十九日戴昌汽船會社所屬
小型汽船衡州丸及同利丸ハ洞庭湖通過中土
匪ニ襲ハレテ乗客及船員ノ金庫掠奪セラル。

REKKAHOHONBU

同北ノ小汽船常徳名ハ其船舶四隻ト共ニ
土匪ノ為ニ抑留セラルリ。

(4) 梅丸事件

昭和三年二月二日清汽船會社貨物汽船梅

丸ハ湘江ノ下流琴棋灣ニ於テ右四十軍ト

賊兵ト拵スル三百余名ノ土匪ニ襲ハレ船員

ノ全部ヲ所持品及衣服ヲ強奪セラルリ。

其ノ際水芝人ナル此國人一名ヲ傷ケリ。

(5) 日華製油會社帆船事件

昭和五年三月二十ハ日華製油會社帆船カ

漢口ニ於テ棉實油シ租界碼頭ヨリ對岸ニ運

搬中流ニテ十舟ニ乘リタル者名ノ海賊ニ

襲撃セラルレ帆船諸共掠奪セラル。

第七項 商標權侵害

民國ノ外國商標ノ傳造及模造ハ凡ニ一九〇

〇年ニ於テ顯著ナルモノアリタリ。一九〇四

年ノ日支追加通商航海條約第五條ニ於テ日本

人ノ商標保護ニ付清國政府ヲ有效ナル指令ヲ

制定スルヲ約セル。其ノ旨左ナリトス。

其ノ後、民国政府ハ商標法ヲ制定シ（一九二二
年）民国商標法ハ当初外国人ノ商標權保護ニ
付充テタル保障ナキ故テ以テ列國ノ承認ヲ得
ズ、民国政府ニテ適當ノ修正ヲ行セタル後、一九
二六年ニ至リテ多數ノ外國ノ承認ヲ得タリ。
亦亦外国人ハ皆其ノ商標ヲ民国商標局ニ登録
セリ。又ハモ規定ノ不健全ナルト（例ハ、氏
名商標法ハ当初商標法違反ニ對スル処罰ノ規
定ヲ其ノ末尾ニ有シタリシモ、一九二九年ニ至
リ此ノ部分ヲ削除シ商標法違反ハ刑法典ノ定

ル修正案トシテ四訂スルカ如キハ処罰緩ニ過
クシト、官憲ノ取締ノ徹底セザルト相俟テ外
國商標ノ中国人ニ依ル侵害ノ事例ハ益々増加
セリ。而シテ民国官憲ノ取締緩慢ナル一記ト
シテ、同官憲ノ帯込商標ノ「模造」ヲ「偽造」
ト區別シ之ヲ摩法ナラストシタルヲ「指摘」
セタルハカラス。即チ昭和六年四月十日、国民
政府ハ「去法院ノ解釋」依リ「商標模造」之
ヲ「偽造」トシテ論スルヲ得ス、其ノ詐欺ノ意圖
ヲ以テ他人ノ既ニ註冊シタル商標ヲ射シタル

之ノ一之ヲ偽造シ以テ論ズルヲ得トノ越
ノ訓令ヲ商標局ニ送ラズ。現在民自ニ在
テハ如何ナル商標モ之ヲ擅ニ模造スルヲ得
ク、商標ノ侵害ニ関シ悪意ノ有セザルハ且
模造ハ勿論商標ノ暗合スルヲ許サストスル
商標模倣ノ清原則ヲ世視スルニテナリ。
民自ニ依ル日本商標ノ侵害ニ付テハ前記ノ
如キ事情ニ依リ容易ニ裁判所ノ救正ヲ得ルコ
ト能ハサルヲ明ヲタルヲ以テ商標ノ侵害
ヲ受ケタル日本人ニ付テ裁判所ニ訴フル手續

商標法第10条

ヲ取ルニ躊躇ニ居ルモノ多数アリ。是等ノ事
件ニ付テハ公衆局ニ陳情シ違反者ニ對シ戒告
ヲ爲サシムルニ止マルモノナルヲ以テ審判期
待ニ致シトス。

日本商標ノ民自ニ依ル偽造又ハ模造ハ全国
的ニシテ又民自ノ需要スル如何ナル日本品
ニ付テモ之ナルニ定数ナリ。而シテ夙ニ大正
十四年五月頃日商鈴木高片ハ製造販賣シ居ル
一味ノ素ニ付各地ニ粗悪ナル模造品表ハシ
又本橋下葉房ノ仁丹ニ付テモ同類ノコトアリ。

商標法第10条



是等ノ食糧及菓物ハ日本ノ有力ナル商居ノ
 製法ニシテ又品質良好ナルモノナリヨリ之ヲ
 為製造者ニ於テ非常ナル打撃ヲ受ケタリ。
 而シテ本件ニ付テハ民國官憲ニ嚴重ナル抗議
 ヲ為シタリシモ迄ニ克多目的ヲ達スルヲ能
 ハサリシモノナリ。以上ノ外左ニ最近ノ顯著
 ナル事例ヲ掲記スルニ止ムヘシ。

(1) 日ノ出仰「襪線ノ商標模造ノ件」
 暹羅民國各地ニ於テ帝國製菓株式會社(本
 店大阪)ノ製菓「日ノ出仰」襪線ノ商標

昭和六年四月四日

商標局ニ登録済)ヲ模造シ品質劣悪ナル製菓
 ヲ販賣スルモノアリ。各方面ニ就イテ調査シ
 タル知悉ハ上海勸工臘線廠ノ行為ナルヲ以
 テ見セリ。仍テ其ノ代理店在亞細亞公司ハ昭和六
 年三月下旬右勸工臘ヲ相手取リ上海特別区法
 院ニ起訴セリ。

然レニ同法院ハ四月一日判決ヲ下シ本件ハ刑
 法ノ所謂偽造ニ非ストシテ原告ニ敗訴ノ言渡
 ヲ為シタリ。

(2) 安住製菓株式會社製菓品猪印紋取線香商標偽造ノ件

昭和六年四月四日

昭和五年申漢口、蘇州及廣東等中南支地方
 二於テ大阪安佐製菓株式會社製菓タル猪所
 蚊取線香標造品ニ偽造商標ヲ附シタルノ多
 數市場ニ表ハレタリ、而シテ右製菓リ調査
 ノ結果上海民園製菓商、上海美之化學工業
 廠外二三ノ民園工場製菓タルヲ證明セシ
 仍テ漢口及上海等ニ於テ日本總領事ヨリ
 公安局ニ取締ヲ要求スルト共、漢口ニ於テ
 上海位線香一牛販賣人タル多田洋行(日本人)
 ハ夏口地方法院ニ蘇州ニ於ケル右一牛販賣
 人タル小橋洋行ハ吳縣地方法院ニ偽造商標
 販賣者タル民園製菓商ヲ相手取リ夫レク
 商標標侵害及標造品販賣差止ニ関スル先訴
 ニ爲シタリ、然レ知漢口ニ於テハ法院ニ試
 案シ以テ標造品ノ没收燬棄ニ及ビ且公安局
 ニ於テ右物品販賣ヲ禁止シタルモ上海ニ於
 テハ何等取締ヲ行フ又蘇州ニ於テハ民園
 製菓社商ヨリ謝罪文ヲ呈告ニ交付スルヲ以
 、自分標造品ヲ販賣セズ且在庫品ヲ燬棄ス
 ルヲト條件ニテ和解方申出アリ十月一日

昭和五年申漢口、蘇州及廣東等中南支地方
 二於テ大阪安佐製菓株式會社製菓タル猪所
 蚊取線香標造品ニ偽造商標ヲ附シタルノ多
 數市場ニ表ハレタリ、而シテ右製菓リ調査
 ノ結果上海民園製菓商、上海美之化學工業
 廠外二三ノ民園工場製菓タルヲ證明セシ
 仍テ漢口及上海等ニ於テ日本總領事ヨリ
 公安局ニ取締ヲ要求スルト共、漢口ニ於テ
 上海位線香一牛販賣人タル多田洋行(日本人)
 ハ夏口地方法院ニ蘇州ニ於ケル右一牛販賣

年増ヨリ漢口及上海等ニ於テ標造セラル漢
 口ノ本極大薬房外十数名ノ民国薬品商ノ製
 造販賣スル同標ノ膏藥ニ高標トシテ使用セ
 ラル者タルヲ以テ漢口總領事ヨケ同地
 郵局ニ取締方要求セラル高標ノ一部ニ民国
 薬房名ヲ拘記セラル以上偽造ヲ以テ目之難
 シ右ノ高標偽造トハ何ナルヤヲ知ラサル者
 ノ世暴ノ言ナリトノ語ヲ回答シ来ク何事
 取締ヲ為スゾトナシ
 (5) 純美商會製「クリーン」^建 膏高標偽造ノ件

純美商會製「クリーン」^建 膏高標偽造ノ件

昭和²年以來南洋各地ニ於テ大阪純美商會
 ノ製造販賣ニ係ル「クリーン」^建 膏(高標
 ハ民国ニ登録済)模造品市場ニ表ハレ偽造
 膏標ノ下ニ多量ニ販賣セラルタリ。右ハ吉
 林又ハ寧波内ノ民国商人ノ所業ナルヲトシ
 判明セルヲ以テ昭和²年二月長春及哈爾濱
 ノ各日本領事館ヨリ同地公安局ニ林ノ模
 造品販賣防止方要求スルヲアケタリ。

第一項 支那軍憲ノ北京海濱向自由交通

妨害

一九〇一年九月ノ北清事変ニ関スル最終協定
書九條ニ依リテ關係列國ハ北京ト海濱トノ
間ノ自由交通ヲ維持セカク天津、秦皇島及
山海關等ノ十二個所ニ駐兵スルノ權アリ。蓋
シ此等ニ在リテ列國公使館ノ安全ヲ期セカトク
ルモノナリ。之ニ關係シ一九〇二年七月ノ天
津議定書ニ關スル日清協約文ハ天津ニ駐屯ス
ル列國ノ軍隊ヲ去ルニテ支那内ニ清國軍隊

支那軍憲ノ北京海濱向自由交通

ヲ駐屯セカクテ得タルモノナリ。且
ニ民間官憲ノ要々本件規定ニ世視シテ軍隊ヲ
二十支里内ニ逐メ又ハ北京ト海濱トノ自由交
通ヲ遮断スル妨害セカク。其ノ最モ顯著ナリシ
事件ハ一九〇五年十二月北清地方動乱ノ際ニ
生シタリ。當時天津ニ在リテ李景林軍ト之ヲ攻
撃セカトセル國民軍トハ天津ト北京トノ間ニ
於テ野戰ヲ行ヒテ實上右区由ノ自由交通ヲ阻
害シタリ。列國ハ民間官憲ニ要求シテ隨時國際
列車ヲ天津向ニ送還セカクタルモ同列車ハ屢

支那軍憲ノ北京海濱向自由交通

之国民軍ノ射撃ヲ受ケヌリ。而シテ三ノ十
二月二十一日ニ至リテ太沽国民軍ノ師ヲ二
十八旅參謀長ハ俄國兵備隊長ニ対シニ二十日
以來同地ヲ通過スル一切ノ外国船舶ニ対シ臨
検搜索ヲ行フヘク之ニ志セサルモノハ砲撃
ヲ加フヘキヲトテ通告スルト共ニ同師團ノ軍
隊ハ日本守備隊ノ軍用電線ヲ切斷シ又ニ十三
日日本郵船會社ノ窓口ヲ墮落ニテ柳多ク
余此情事變議定書及之ニ關係アル諸取極ノ強
旨ニ反スル行動ヲ繰リ返シテ行ハル。

予之項 内水航行及沿岸貿易ニ対スル在道
ノ件
日本商船ヲ揚子江ニ於テ上海及廈門ノ航路
ニ従フニ又沿岸各地ニ寄航スルモノハ一八
九五年ノ下ノ開條約予之條約依リ内水航行權
ヲ獲得シ且モ濠洲島内航路ヲ開闢スルノ權利
ヲ得ルニ結果ニシテ又日本商船ノ民國ノ海運
界ニ対スル貢獻ハ何人モ之ヲ首肯セサルハカ
ラサル所ナルカ、民國政府ハ國權回復ニ馳
テハ、ノ余リ日本商船ノ民國海運界ノ地位ヲ

此は民国政府は是等ノ備置者ヲ日本政府ノ
 發給セル海技免狀ヲ有シ其ノ資格充テナル
 又ノナルヲ知リテ故意ニ民国政府發
 給ノ海技免狀ノ受有方ヲ偽制シ居レリ。即
 4 民国交通部ハ昭和五年四月九日大連稅關
 ヲ始メトシ各地稅關ヨリテ自給交通却發給
 1 海技免狀ヲ有セサル外國船ヲ乗組マシ
 4 船ハ民国汽船ニ對シテハ出港免狀ヲ支附
 セサルハキ趣旨ノ告示ヲ出サシメタリ。

婦女ニ極大ニ危険ナル方格ヲ以テ日本商船ニ
 對シテ妨害又ハ圧迫ヲ加ヘリ。是等妨害
 又ハ圧迫ノ計劃的ナル己ノヲ左ニ敘述ス。此
 (一) 外國船ヲ二付スル 交通部發給海技免狀受有
 方格制ノ件
 1 民國人ノ船舶運用ノ技術ハ今尙幼稚ニシテ
 大型ノ汽船ニ至ラテハ船長及機長等其ノ他
 ノ高級船員ハ外國人ニ求メサルヲ得サル實
 狀ニシテ日本人高級船員ニシテ 民國汽船ノ
 船長又ハ機長等ニシテ百名内外ニ上

日本人に對し一種ノ圧迫ヲ加フルモノナリ
 而シテ日本人ニ對シ民船規程ノ是レハ負
 ノ受有テ限制スルモノハ一面ニ於テ均等
 權ノ侵害スル性質ヲ有スルモノナリ。(尚
 幸通部ノ制定セル海技員規程ニ關スルハ
 規ニ依ルハ右負狀ヲ外國人ニ於テ受有シ
 得ル爲ニハ長年月ノ徇例ハ船考トシテハ
 日本民船ニ乘船スルモノヲ條件トシ
 得ル之ヲ勵行シ上ハ三百人以上ノ日本
 船ニ乗船スル民船船主ヲ驅逐セラルル

昭和十一年四月二十一日

トトナレ
 (一) 外國水先人廢止ノ措置
 日本其ノ他ノ外國人カ上海其ノ他揚子江筋
 ニ於テ又沿岸ノ商港船ハ天津及青島ニ於
 テ水先人ト爲リ在ルハ畢竟日本其ノ他ノ外
 國政府カ内水航行及沿岸貿易ノ權利ヲ獲
 ズル結果ト思フモノナリ。トモ、ニ、ニ、且
 外國人カ水先人ト長ク在リ者ニ對シテ是
 ノ及國ニ於ケル海運ノ發達ニ貢獻セルモノ
 ナリトアリ。従テ外國人水先人ノ地位ハ

昭和十一年四月二十一日